

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580057

研究課題名(和文)近代日本の人文知形成に関する基礎研究 『郵便報知新聞』掲載外国小説原典調査から

研究課題名(英文)The fundamental research of translations by Shiken Morita in "Yubin-Hochi Shinbun"

研究代表者

馬場 美佳 (BABA, Mika)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：90405548

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代文学の成立と新聞メディアとの関係解明を、近代日本の人文知の形成という観点から行うための基礎調査にあたる。研究対象は、19世紀末の明治日本で紙面に小説を掲載した最初期の新聞『郵便報知新聞』だが、文学主筆の森田思軒が掲載した作品のほとんどが翻訳小説であり、かつ原著不明という問題があった。そこで大英図書館を中心に文献調査を行い、結果、原著不明21作の内、13作を明らかにした。この基礎調査の過程で、思軒訳の新聞小説が後の近代文学的規範とは異なる選定になっていること、しかもそれが大英帝国の情報ネットワークのなかで再検討すべき課題であることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This is a fundamental research for the study to make the Japanese modernization system clear. In particular, I focus on relationships Japanese modern literature and newspapers. A main subject is "Yubin Hochi Shinbun"(Tokyo) issued at the end of the 19th century. This newspaper provided a large number of novels Shiken Morita translated. But most of originals have been obscurity. So I searched for them at the British library mainly. Then, at last, I could find half of more of the originals. Most of originals were in the newspaper articles or short stories of America, Australia, Canada, New Zealand. This research gives me a conviction that it exists that intellectual and complicated relationships Japanese modern literature and overseas media linked by global networks of British empire in the 19th.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日本近代文学 明治文学 新聞小説 翻訳 森田思軒 郵便報知新聞 イギリス 植民地の新聞

1. 研究開始当初の背景

(1)日本の近代化を考える際、定期刊行物の登場は、その黎明期から主要な条件として見逃すことができないものである。それは文学の近代化を考える場合も同様で、日本の文学史において、文学と新聞・雑誌との関係は、抜き差しならないものとしてある。一方、世界史的に見て、新聞小説・新聞連載小説は必ずしも文学の近代化において必須のものではない。たとえばイギリスでは新聞小説は発達せず、フランス・アメリカでは逆に新聞連載が大きな役割を果たしてきた。日本は後者に分類されるが、このこと自体が持つ意味の検討が、もっと多様な素材と観点からなされる必要があった。

(2)文学史において、文学と新聞の関係における黎明期は「続き物から新聞連載小説へ」という日刊的要素と進化史観によって語られ、大正・昭和以後は「新聞小説 = 大衆の読み物(低俗)」という大衆文化論が行われてきた。近年、各新聞の特徴、あるいは読者という概念の導入などによって、新たな視座から再検討されているが、黎明期の特徴の特殊性は、さらなる検討の余地がある。たとえば、本研究の代表者もまた、近代文学成立期に活躍した新聞小説家・尾崎紅葉について『「小説家」登場 尾崎紅葉の明治20年代』(2011年)を上梓し、紅葉にとっての『読売新聞』という媒体の意味を考察した。拙著において、紅葉が『読売新聞』の紙面と連動する小説を書いていたというだけでなく、そこに文学知を共有する読者の公共圏を生み出そうとしていたこと指摘し、従来通俗とされてきた紅葉文学の特徴を同時的問題として捉え直した。だがこれによって、新聞小説が問題になる明治20年代初頭、紅葉がとりわけ対抗し、意識していたのが、矢野龍溪・主宰、森田思軒・文学主筆の『郵便報知新聞』であったことが、より明確になった。しかし、これまで、日本の新聞小説に与えた影響という観点から『郵便報知新聞』が注目されたことはなかった。

(3)『郵便報知新聞』は、明治19年の龍溪による改革で飛躍的に部数をのばし、21年には東京の新聞として最大の発行数を実現した(野田秋生『大分県先哲叢書・矢野龍溪』1999年)。この改革の目玉が新聞小説であり、それを掲載した「嘉坡通信/報知叢談」欄である。当時の告知によれば「社友九名」が交代に「三四日読切りの小説を訳述し又は自作し匿名にて之を本誌上に載する」ことを目的とし、明治19年10月1日より22年末までに30作が掲載された。だが、最初の2作は社長にして主筆の龍溪が参加しているものの、以降ほとんどが文学主筆の思軒による翻訳であったことが『明治翻訳文学全集翻訳家篇5 森田思軒集』(2002年)等の検証により判明している。そして同書所収の年表によれば、こ

の内いまだ原著が不明なものが19作あり、「嘉坡通信/報知叢談」と銘打たなくなった明治23年以降の思軒による匿名の翻訳新聞小説を含めると21作となる(『郵便報知新聞』以外の媒体に掲載された原著不明分はさらに3作ある)。これまで、『郵便報知新聞』が新聞に積極的に小説を掲載しながら日本近代文学成立への影響が言われてこなかったのは、ほとんどが翻訳小説であるということが大きい。加えてその大半の原著が不明であることも原因であると考えられた。そこで、まず新聞と文学の近代化の関係を捉え直すためのあらたな視座を得るとともに、思軒による翻訳新聞小説の原著を明らかにする基礎調査が必要であった。

2. 研究の目的

(1)近代日本の人文知形成と近代文学の成立の関係解明の基礎研究として

自由民権運動の終焉とともに、大新聞・小新聞が解体し新聞が再編された時期は、まさに近代文学が産声をあげた時期と重なる。この時期の主要な一紙である『郵便報知新聞』を対象に、紙上に森田思軒が掲載した翻訳小説21作の原著を明らかにすることを第一の目的とした。この際、文明批評・人生批評を基準とした純文学性と大衆性との葛藤におかれてきた新聞小説について、人文知形成というコンセプトを新たに用いることにより、国際的な動的視点のなかで現象を捉えるよう意識することも目指した。

(2)森田思軒研究として

思軒は明治期からすでに翻訳王と呼ばれた人物であり、翻訳文体に多分の影響を受けた近代日本語の形成に、彼が果たした役割ははかりしれない。ゆえに彼の翻訳という営為を考える上で、少なくとも原典・原著は明らかにされるべきものである。だが19世紀イギリスの具体的な資料をもとにして対応関係を明らかにすることは行われてこなかった。渡英以降に本格的に翻訳を始める時期の思軒の翻訳小説の全貌を明らかにすることで、思軒が近代日本にもたらしたものの総体を見渡すための基盤を作ることにも目的とした。

(3)翻訳文化研究として

従来、文学の翻訳と原典・原著との関係は、特定の作品と翻訳者の間の行為とされるが、本研究の対象は、特異な性質をもっている。まず、ほとんどが「嘉坡通信/報知叢談」欄に掲載され、あくまでもシンガポールから寄せられた様々な海外事情についての通信という立場をとる。それゆえに、小説の原著者名が記されず、翻訳者も匿名となっている。翻訳文学研究側からのアプローチがなかったのも、オリジナルを最優先とする近代作品とみなしにくく、研究の対象になりにくかったためと思われる。しかし今回、人文知の移

入と加工という観点から、それらが龍溪や思軒が直接触れた欧米のどの人文知のなかから選択され位相変換されたのかを検証することにより、翻訳の明治的あり方を描出することを旨とした。

3. 研究の方法

原著不明作品群の主な舞台がイギリスであることから、イギリスにおける文献を中心に調査を進めることとした。そのため、年1～2回、イギリスをはじめとする海外における文献調査を行った。詳しくは以下の通り。

(1) 海外での調査のための事前準備（全調査期間を通じて）

海外での文献調査において、視野をより広くもつため、イギリスを中心とした欧米の新聞研究及び定期刊行物研究に関する国内・外における文献を、実施期間を通じて収集・精読していった。国家間をまたがるメディア研究は昨今さかんになりつつあり、随時更新される最新の研究成果を参考に、原著不明作品群の調査範囲を検討していった。

(2) 海外での文献調査

第一回海外調査（平成 25 年度）

イギリス・大英図書館にて約 3 週間、ドイツ・ベルリン州立図書館にて 5 日間の文献調査を実施した。

第二回海外調査（平成 26 年度）

イギリス・大英図書館にて 2 週間の文献調査を実施した。

第三回海外調査（平成 27 年度 1 回目）

イギリス・大英図書館にて 2 週間の文献調査を実施した。

第四回海外調査（平成 27 年度 2 回目）

フランス・国立図書館にて約 4 週間の文献調査を実施した。

(3) 『郵便報知新聞』記事のデータ化および考察

龍溪・思軒ともに、イギリス滞在中に通信員として従事していた。帰国後の『郵便報知新聞』の改良はその滞在期間に考えられたものだという(森於菟「森田思軒の滞欧私信」『明治大正文学研究』22号、1957年)。その紙面は「海外通信」が大きな位置を占めている。とくに龍溪は、帰国後通信社の役割に大きな関心を抱き、世界的にもロイター社などの通信会社が躍進をはじめた時期でもあり、単なる海外記事の報道としてではなく、「海外通信」そのものの本紙における役割を、原著不明作品の調査と並行して考察するためにデータ化作業を実施した。

4. 研究成果

(1) 各海外調査での成果

先行説及び単行本翻訳説の検証

第一回海外調査の成果より
まずは、大英図書館にて、先行説の検証か

らはじめた。原著不明の翻訳小説群について、これまでは、思軒が海外視察の帰途、アメリカからアップルトン出版(Appleton & co.)の書物を 20 冊以上もちかえり、それを訳載したのでないかという原抱一庵の説(「我の昔」『文芸界』第 2 巻第 2 号、1903 年)が有力であった。そこで当時の当該出版社の出版リストを入手・調査し、原の説が必ずしも思軒の翻訳全般に及ぶものではないこと、特に今回の調査対象については、根拠が薄弱であることを明らかにした。

続いて、思軒の翻訳で原著が明らかな作家群に着目し、全集・同時代に刊行された諸本をもとに、彼らの著作のなかに原著不明作品群と対応する作品がないかを調査した。ここで思軒が入手したと想定されたドイツのタウフニッツ(Tauchnitz)出版の刊行物について調査する必要が生じたが、日本の各図書館、大英図書館にも所蔵がないものがあつたため、ベルリンの州立図書館における調査を 5 日間追加した。これらの調査の結果、思軒の翻訳範囲は、当時、単行本を出版していた等、英語圏で著名な作家に限らず、さらに広範囲に及ぶ可能性が出てきた。このため、各国新聞データベースによる追加調査の検討を開始した。

海外新聞記事の可能性

第二回海外調査の成果より

イギリス・大英図書館における調査を行った。調査対象・範囲を広げ、19 世紀末からイギリスで流行をはじめめる Short story・Short novel・Tale の、現在ではあまり知られていない書き手たちに注目し、彼らの作品を掲載する短編集・定期刊行物について調査を行った。だが、当初想定していたものと大きく異なり、多くの原著が書籍・雑誌といった出版物由来ではない可能性が高まった。

このため、滞在の後半からは、英語による新聞を収集した各国新聞データベースによる調査に積極的に切り替え、進めていった。これにより、19 世紀末に展開した新聞をめぐる国際的な状況のなかで、新聞と文学、さらには著作権の黎明期における出版物が置かれた状況について、より世界史的なまなざしで捉え返す必要を実感するに至った。ここで、予定した調査の方針をやや変更し、原著が判明した数作に焦点を当て、より詳細な調査の方針を立てることを行った。

大英帝国の植民地とその新聞ネットワークの存在の判明

第三回海外調査の成果より

引き続き、大英図書館にて原著不明作の調査をおこなった。とくにすでに判明している分について、その掲載状況の国際的な広がりを調査した。

この調査により、イギリスを舞台にしつつも、実はイギリス本国以上に、アメリカ、ニュージーランド、オーストラリア、カナダと

いった、大英帝国の植民地文化圏ともいる範囲の新聞に、思軒訳の原著が多く見出されることが判明した。それに加えて、国家間をまたぎ、単行本出版後の新聞掲載、さらには新聞掲載後の別新聞転載といった事態が生じており、非常に複雑な状況が明らかになった。

以上から、調査の過程において見出した多岐に渡る問題点のなかでも、新聞と植民地経営問題に的を絞ることにした。

また、この調査で、同じ明治文学と人文知形成の問題系の一環である、黒岩涙香の原著不明作品群の問題解決の糸口をみだし、さらには夏目漱石の創作とイギリスの定期刊行物との関わりを示す資料を発見することができた。

英語圏文学のフランス文化の受容と新聞

第四回海外調査の成果より

原著が判明したもののうち、数点がフランスとのかかわりを描いたものであるが、匿名であるがゆえに、通常の日本および大英図書館では詳細な情報がえられない作家がいた。そのため、フランス国立図書館にて調査を実施した。これにより特定の一時期に流行した作家の作品の新聞小説的素材との類遠性を検討する視座を得た。

以上、4回の海外調査により、当初日本国内の新聞事情に多く還元されるかと予想された原著不明問題が、当時の大英帝国を中心とする植民地と新聞のネットワークと日本の近代化との関係として、改めて国際的な視野に立った考察を必要とする問題となることが明らかになった。

(2)判明した原著一覧

今回の調査をと通して、『郵便報知新聞』の原著不明の21作中、13作が判明した。具体的には以下の通り。

1888(明治21)年掲載分

「夢中夢」

Wilkie Collins 「Percy and the Prophet」

「女旅客」

Richard Davey 「A Queen's Adventure」

「右足」

Heinrich Zschokke 「The Lost Leg」

「密封書」

無署名記事 「The Sealed Instruments」

「元日」

無署名記事 「My New Year's Case」

「猫」

無署名記事

「Staying Late at the Office」

「倫敦辻馬車」

無署名記事 「A Pound a Minute」

1889(明治22)年掲載分

「代言人」

無署名記事 「The Lawyer's Story」

「狼声」

無署名記事 「Trapped by Telegraph」

「是はソモ」

無署名記事 「A Queer Situation」

「偶語・巴里探偵の話」

無署名記事 「A French Detective Story」

1890(明治23)年掲載分

「財の行くへ」

無署名記事 「My Lady's Money」

「庶武の凶報」

Nathaniel Hawthorne

「Mr. Higginbotham's Catastrophe」

いずれも複数国の複数の新聞に掲載されたり、ときにはタイトルも変化していたり、テキストが編集されていたりと、加工の跡が確認される。タイトルについては、調査の最終段階で、もっとも思軒の翻訳内容に近似しているものを例としてあげた。

以上、調査方法や範囲を一から検討せねばならなかったこともあり、原著不明作品全てを明らかにすることはできなかったが、新聞小説と翻訳をめぐる従来の研究の前提を見直し、今後、さらに調査していく方向性を得られた。

(3)今後の展望

上記の調査から、本研究が翻訳小説の原著を明らかにするにとどまらず、19世紀末の国際的な人文知形成と新聞ネットワークと日本文学の近代化にかかる案件として、改めて課題を提起する必要性が生じた。これらについては、今後、基盤研究(C)の課題として採択されているので、引き続き調査していく計画がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

馬場 美佳、戦死者よ、個人へ帰れ 夏目漱石「趣味の遺伝」と The View of the World、稿本近代文学、査読有、第40集、2016、22-39

〔学会発表〕(計1件)

馬場 美佳、森田思軒訳『郵便報知新聞』掲載・原著不明作品群へのアプローチ、2014/12/06、日本比較文学会九州支部、於福岡大学(福岡県福岡市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

馬場 美佳 (BABA, Mika)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号: 90405548